



標高 2500m（河川からの比高 600m）の山頂に築かれた天空都市  
標高 3000～4000m にいくつかの遺跡があり、これらはインカ道（歩道）で結ばれている。本遺跡はその内の最大規模を誇り、現地ガイド（日本人）は最大 5000 人程度が居住していたという説を主張。赤道に近いことから、積雪があるのは標高 4000m 以上。



畑と住居跡：

ペルー観光において、本遺跡は圧倒的な収入源であり、アクセス道を含め、補修作業等が行われていた。



命がけの段々畑

木が茂っていなければ作業できないのでは…。現に、観光客の転落事故も発生している…

ちなみに、入場者数は時間帯毎に一定数以下となるよう規制されている。



あいにくの小雨が、幻想的な雰囲気醸し出していた。正面の山に上るルートもあるが、少し腰が引けそうである…



要塞説を裏付けるような建造物（広い土地がいくらでもあり、信仰か敵からの防御のため築いたものと思われる…）



敷地内にわずかな湧水があり、その一郭で地すべりが…

◎ナスカの地上絵（ペルー：2015.3.7）



宇宙人

ナスカ平原（砂漠）に描かれた地上絵を軽飛行機で観光．“宇宙人が描いた”などとの説に子供の頃から興味を抱いていたが，最初に山腹に描かれた地上絵をみせられて…



ほとんどが平地に画かれており，天（神）へのメッセージであることが分かる．  
円内は地上絵“手”．建物は観察塔．約 700 程度画かれているとのことであるが，ガイドなしでは見つけにくい（日本人が搭乗している場合，優先的に片言の日本語でガイドしてくれる）．  
中央に延びる道路はパンアメリカンハイウェイ（アラスカ～アルゼンチン：48000km？）．



砂漠地帯の低地に沿って農地が広がる.



砂漠とは砂だけかと思っていたが、むき出しの岩盤がひろがり、“砂や岩石の多い土地”と定義されていることを初めて知った.

◎イグアスの滝（ブラジル，アルゼンチン：2015.3.8,9）



ブラジル，アルゼンチン，パラグアイの国境に位置するイグアスの滝。遠く，ジャングルの中に滝壺からの白煙が見える。



玄武岩台地に刻まれた滝壺。延長4km，落差80m。滝の左がアルゼンチン，右がブラジル，遠方がパラグアイ。元来パラグアイの土地であったが，戦争を仕掛けたことでこれを失ったとのこと。



滝壺は少しずつ後退しているとのことであるが，上空からは退行性の断裂が認められる。（左がブラジル側で，滝の全容を眺めることができる。右のアルゼンチン側では，トロッコ列車と歩道橋を伝って最上部の滝壺を散策したり，船で滝壺に突入することができる）

（南米の農地について）

ペルーからブラジルへの空路，アルゼンチン？上空では視界いっぱいには広がる平坦な農地と，どこまでも続く一直線に延びる農道，その中に数個の農家（家屋）しかないことなど，英仏でみた以上の衝撃を受けた。ひょっとしたら日本移民が関わっているのでは思われたが・・・



初めてのヘリであったが、操縦は以外と簡単そうであり、運良く副操縦席？に座ることもできた。



百均で求めた雨カッパは着衣と同時に破れ、失笑を買ってしまった・・・  
数年前の座礁転覆事故を受けて、ほとんどの船長が右側の安全なところにしかなかったようであったが、腕を振って左の滝壺に行くよう挑発したら、本当に突っ込んでいった。  
南米の人はなんと楽しいことか・・・



ジャングルは“蒸し暑い”というイメージがあったが、30°前後の気温の割には苦に感じなかった。

ガイドは日本から移民した70才前後の人であった。ジャングルを切り開いて農地を造成したが3年間は収穫がなかったこと、連作ができない（肥料がない？）ため最後は牧場にするとのこと、四国ほどの広さの土地を得た人のこと、ワニなど食べるものには苦労しなかったこと、夏の暑さ対策として蛇を首に巻いて過ごしたこと、夜にはそれをおいしく頂いたことなど、ワイルドなお話を伺った。

Web上では移民同士の対立なども記載されており、大変な苦勞が忍ばれると共に、しばし考えさせられた。

ちなみに、ここではワニ、オオトカゲ（の子供）、アライグマなどを見ることができた。



ブラジル側のレストラン（天井のない合理的な建築のように思われた）。



バスのローマ字と日の丸：  
ペルー同様、どこでも厚遇されている印象を受けた。



ホテル玄関の花瓶：  
透明な器を利用した斬新な飾り付けが印象的・・・